

〔特集〕

社会人研究者としての歩みとこれからの課題

——博士論文完成までの経緯——

櫻井 善行

名古屋市立大学大学院経済学研究科研究員

要 旨

誤解を恐れずに書くならば、研究には「独断」と「偏見」が不可欠であると筆者は考えている。当たり障りのない通説に依拠すれば、それは模倣と大差がない。研究という行為は、高い視点からのオリジナリティが必要とされる。この至極当然の命題にいづくのに、私は多くの年月を要した。というのも、長く社会人としての常識に浸り過ぎていたからである。前例を踏襲すること先行研究を検証することでは天と地の隔たりがある。本稿は、社会人研究者としての歩みとこれからの課題というテーマで、博士論文完成までの経緯について綴ったものである。社会人研究者の使命は、働き学び研究する（「働・学・研」）ことである。研究は俗世界を眺めて真理に近づく手法も必要である。社会人研究の優位性は、実社会での経験による豊富な事例があり、そこから高い水準に昇華させていくことが必要となる。本稿は、社会人研究者として、多くの人と出会い、様々な異見との遭遇と関わり、目的にたどりつくまでの報告である。

キーワード：「働・学・研」、社会人研究者、企業社会、企業福祉、未来

The current process and future challenges as a working researcher

——The background to completing a doctoral dissertation——

Yoshiyuki SAKURAI

Nagoya City University Graduate School of Economics Researcher

1 はじめに

私はこの3月、博士（経営学）¹⁾の学位を名古屋学院大学から授与された。社会人研究のモットーである「働き、学び、研究」（働・学・研）する課題を抱え、研究を志したのは40代初めのことであった。しかしその後の研究の歩みは順風満帆ではなく、幾度となく多くの困難に直面し、ある時は逡巡し、ある時には逃げだそうとしたこともある。「もの書き」は、さほど苦手ではないが、論理的体系的な論文を書く手法などは身につけないまま年輪を重ねてきた。しかも本業の仕事を抱えながらも、一方で研究を志すというその困難さは、当事者でないと分からない。にもかかわらず、ここまで来ることができたのは、私の研究活動をサポートしてくれた環境や、背中を強く押してくれる人がいたからである。

人生の中で、研究活動に限らず、これまで多くの人と出会い、そのことが私の生き様に有形無形の影響を与え、私が視野を広げる契機となった。だがある時期までは同調する集団の中での学習や研究を含めた実践が中心であった。しかし研究活動を始めるにあたって、様々な傾向の集団や個人と触れあうことになった。こうしたことがその後、特に立ち位置が私とは異なる立場からの「異見」こそ、耳を傾けることが必要で、自らの発達や成長を促し、前に進むことが出来ることに気がついた。日々出会う人々との交流と実践の体験こそ、私の研究活動を前に進める原動力となった。

その意味で、社会人としての日々の実践と人々との出会いが、研究の視野を広げ、前に進むことを可能とした。博士論文の完成に直接間接に貢献された方々に、感謝の意を記すとともに、これからの課題をこの小稿で記したい。

2 企業福祉研究への眼差しと挑戦

私事ながら、博士論文を書き上げるに至った研究への関わりをまず触れることにする。私の博士論文のテーマである、「企業福祉」²⁾とは、厳密に言えば正式な学問用語ではない。そもそも利潤追求を第一の課題として営利活動をおこなう「企業」と人々の幸せをめざす「福祉」という2つの用語を結合したところに、この用語の独特な意味と位置がある。ある人からは、形容矛盾だといわれた。そうかなあと思いつつも、全面的に同意は出来なかった。何よりも、多くの人々が企業福祉に引きつけられて受容してきた事実がある。どうして企業福祉は人々を魅了させるのかという思いを抱いた。その解明のためにはということが研究の出発点となった。

こうして、今から30年前に、まずは「企業社会」という用語に惹かれ、それと深い関わりがある「企業福祉」へと関心が向かった。これが研究テーマへの接近であり、ささやかな出発点であった。その後は時として歩みを止め、模索し、あるときにはこのテーマから逃げようと考えたときもあった。

しかし私の生活基盤である西三河にはトヨタ自動車という巨大な企業があり、その存在は私の研究意欲を駆り立てることとなった。トヨタに代表される日本の大企業の存在と向き合うことが一つのライフスタイルとなった。後述する猿田教授との出会いによって、「トヨタ研究」と関わるようになった。その縁で企業福祉を媒介に、いくつかの共著を世に出すことが出来た³⁾。それをなんとか1つの体系、論文としてまとめてみようという思いは、10年ぐらい前からあった。しかしそこから先に進むことは出来なかった。重大な一歩を踏み出すきっかけを見つけることが出来なかったからである。

しかし今回初めて、これまでの業績を1つのものにまとめてみる気になった。それは時に厳しい言葉をかけながらも、絶えず私の背中を押してくれた人がいたことが大きな要因である。博士論文は、これまでの研究業績の集大成になる。現在は1つのことをやり終えた達成感と、これではたしてよかったのかという自問も含めた反省の思いが交差している。

ところでこの企業福祉に向き合うことで、企業福祉には大きな問題点が内包していることに気がついた。同じ地域社会においてもその恩恵を享受する人と、享受できない人との格差が歴然として存在する。明らかに現代社会の1つの現象である「格差社会」を体現している。だが当事者の中にあるはずの漠然としたこうしたことへの問題意識と是非は、結局は利益を受容する側からは、「それでかまわない」という声にかき消されてしまう。いつのまにか「共生」の視点が建前だけに化し、実際は欠落してしまう。利益享受されることへの「暗黙の了解」によって、それから先の思考回路は停止されてしまう。労働現場の内外でのそうした光景を何回となく散見した。

その企業福祉の事例考察をし、研究として深めるために、トヨタという企業と西三河という地域社会は絶好の「教材」を提供してくれた。社会人研究者は、高尚な理論から現実を下りることよりも、現実の社会現象を正確に捉えて、それを高い次元のものに向かわせていくことこそ意義がある。若い頃から関心があった日本の大企業の位置、それに影響を受けた地域社会、そこに住む人々の生活、さらにはそこで働くということ、それらを含めた人々の「未来への希望」への関心が失われなかったからこそ、研究への意欲が消え失せなかったのであろう。

だがそうしたことを語り尽くすこと自体が、

いたずらに風呂敷を広げていることにもなりかねない。実際に博士論文を書き上げまとめて行くにあたって、私がぶち当たった大きな壁であった。これは私が社会的な常識にまだこだわっていた段階でもあった。

ところで先にも触れたように、私は十数年前から個別のテーマの小論をいくつか書き上げてきた。博士論文はその小論をとりまとめたもので、研究人生の集大成を意味する。にもかかわらず、ずいぶんと時間を要した。しかも今見ても、それが完成されたものであるかは甚だ心許ない。一つのことを体系化してまとめ上げることがこんなにも大変であるということを改めて思い知らされた。

とはいえ博士論文では企業福祉の本質に、真摯に向き合った。企業福祉と関わりながら過去から現在までの日本の姿ならびにシステムに真摯に向き合うことで、日本の未来の課題も見えてくる。書籍化では学術的な色合いを失わず、なおかつ読者の関心をそそるにはどうすればいいのかということを念頭に書き上げてみた。読者諸氏の批判を願ってやまない。

3 わが生業と青春

ところでここに至るまでの理解をしてもらうために、私の生業と人生の一部を紹介するのも無駄ではない。私は「団塊の世代」の最後に当たる1950年3月生まれである。父親が戦地（満州）に出向き、敗戦により満州で捕虜になってタシケント（現ウズベキスタン）に移送され、日本に帰還したのが1948年のことである。父親が機械工であったため外地でも重要視され、帰国後も当時少しずつ日本社会で役割を果たしていく自動車産業と関わるようになった。父親はその後自動車関連部品工業の起業をし、そう

した中で、私も高校卒業当時、自動車の部品製造という仕事に、大企業の請負労働として関わらざるを得なかった。高度経済成長期、家庭を顧みない仕事人間を体現したライフワークの父親への反発があった。

1970年前後の時代、多感な青年が、自分の意に反することを強要されたことへの思いが、トヨタという企業と西三河という地域にこだわらざるを得なかった理由である。その後、回り道をして、大学の夜間課程に進学して、いわゆる勤労学生として青年時代を過ごした。そしてその後は、自らの生き様を模索しながらたどり着いたのが、教職（高校）であった。1980年のことである。

日本では、後期中等教育と大学の間には「教えること」では連続性を見いだせるが、入試以外では、内容に大きな隔たりがある。とりわけ日本の後期中等教育以下の教育現場では、先行事例の踏襲が原則である。新たなオリジナリティの提起をすることは、勇気が必要であり、困難なことが多い。しかも教育労働は、「感情労働」の一つである。対人間関係（子ども、親、地域社会）で有効に機能しているときは成就感を体得できるが、必ずしもそうした場合ばかりではない。しかも近年は「教員の働き方改革」なるものが話題とはなるが、現場では予期せぬ事象に振り回されことは日常茶飯事である。その時は今思い返せば、じっくりと思案する時は少なかったように思える。日々の諸事象に対応するのがやっとであった。

40代になり、少し余裕ができるようになると、研究活動を始めたいという思いが芽生えてきた。また日本社会の中での底辺に位置する構造を観察したいという思いから、職場を定時制高校に移した。1990年代以降の定時制高校は、明らかに高度経済成長時代とは異なった学校シ

ステムとなりつつあったが、日々学校現場での体験は、十分に刺激のあるものであり、私の研究活動への意欲を駆り立てることとなった。現代社会の中では決して恵まれた位置にいるとはいえない、下層に置かれた生徒たちとの出会いも又、私に弱者へのこだわりを教えてくれた。

4 社会人大学院と基礎研での研究活動

ところで今から25年以上も前、書店で『日本型企业社会の構造』⁴⁾という書物を目にした。その書には、現在では名の知れた多くの論客が執筆していたが、その中に同じ題名の「日本型企业社会の構造」という論文（第3章）を執筆している十名直喜という若い論客に目が行った。後から知ったことだが、当時十名氏は新鋭の名古屋学院大学の助教授として赴任したばかりであり、社会人研究者として先駆的存在であった。当時流行の渡辺治「企業社会論」と向き合っている様子が窺え、その印象が今も鮮やかに残っている。だがそのときは、その書物への関心が中心であり、そこまでであった。それはまだ私の意識に研究志向が十分に芽生えていなかったからであろう。私は当時40歳代になったばかりであった。いまでいう「アラフォー」であった。

私の研究者としての出発点は、その時期の社会人大学院への入学から始まる。今でこそ社会人大学院は、大都市を中心に雨後の竹の子のように設立されている。私が入学した大学院は、社会人の受け入れ可能な昼夜開講制の先駆的事例であったが、経済学の範疇ではいわゆる計量的手法を行使する研究者が多数を占めるため、当初より違和感があった。それでも学内では数少ない実証分野と社会政策研究に関わる指導者の下で、勤労の合間に「研究」を始めることに

なった。

「基礎経済科学研究所」と関わるようになったのは、それからしばらくしてからである。基礎経済科学研究所が発行する「経済科学通信」が学内の資料室で閲覧できたことが大きい。それを契機に「基礎研」と連絡を取り、積極的に関わるようになった。

その後、21世紀初頭に彦根(滋賀大学)であった基礎研夏季大会での、自由論題で発表する機会を得た。そのとき同じ分科会に、十名教授がいた。そのとき会話し、帰路駅まで共にしたこともあり、いろいろ示唆に富んだ言葉も聞いた。その別れ際に、「今日の報告、おもしろかったよ」という印象的な言葉をいただいたが、当時もまだそこまでの関係でしかなかった。

現在に繋がる関係を持ったのは、それからしばらくしてからのことである。私が事務局を引き受けていた「愛知労働問題研究所」での総会の記念講演に、『時代はまるで資本論』の著者の1人で、地元大学に在籍している十名直喜氏に白羽の矢が立った。その依頼を私が任せられ、そこから現在までの交流が始まった。だがそれでも、この先の道(博士論文完成)を歩む決意にはまだ至らなかった。

人は「とある決意」をするには、しばしの時間が必要とされる。結局、私が本格的に研究に向けた歩を進めるようになったのは、時間的にも余裕ができる、前職を定年退職した2010年以降のことである。それでもそこから先への道にはまだ越えたい障壁があった。といってもそれは自分自身が思い込んでいたことであった。

5 博士論文への挑戦と自己変革

2015年の春、基礎経済科学研究所の春季大会が名古屋学院大学大学院栄キャンパスにて行

われた。発表機会もあり、それを契機に、やっとの思いで、今までの「業績」をまとめ、「博士論文」に仕上げようと決意し、十名教授の研究室の扉をたたいた。懸念したのは、私の健康状態と年齢であった。医薬品を服用し、定期的に睡魔が襲い、しかも高齢者の範囲になった。果たしてやりきれんかという不安が脳裏を遮ったが、十名教授の強い後押しがあり、産業システム研究会(博士課程十名ゼミ)に常時参加することになった。

月2回の研究会は、参加者全員が報告する密度の高いものであった。先輩として参加する太田信義氏や井手芳美氏らの真摯で謙虚な研究への取り組みはすごく刺激になった。とりわけ企業人の生涯を終えたあとで、再度研究に謙虚に取り組む太田氏の姿勢には、社会人研究者としての揺るぎない姿勢と信頼を感じた。母国を離れ異国で研究に励む程(永元・遠紅)兄妹の姿も刺激になった。出会う人すべてが、私の師の役割を果たした。

この2年で痛感したのは、今までの固定的な価値観を超えるために柔軟な思考様式が必要とされたことである。現代社会の変化は、その本質の理解は大切だが、人間の生き方や働き方を一面的に見るのではなく、立体的複眼的に考察することで、これまでの古い思考方式を乗り越えることも可能だと考えるようになった。

また何よりも、1つのコンセプトとしてまとめることの大変さを痛感したことである。これまでに公刊した論文は約20本あるが、いずれもパーツにすぎない。それらをどう組み合わせで体系化するか、統合するか。自動車メーカーに例えれば、部品メーカーから統合メーカーへいかに脱皮し飛躍するかが問われたのである。十名教授からは、そこを徹底的に鍛えられた。

論文の体系化を進めていくにあたって、部品

(既出の拙稿)の洗練化とともに、足りない部品(章)もつくっていく必要がある。それらを同時並行的に進めた。

完成までに多くの時間を費やした。しかしそれは、複眼的な視野と創造的な編集力を有する一人前の研究者へと脱皮＝成長していく上での、不可欠なプロセスであったと感じている。

固定観念だけでは解決しない一例をあげるとしたら、ものづくりである。ものづくりはある時期まで、「大量生産・大量消費」というのは必要な手法であった。確かにこれまで「大きい」「多い」「早い」ということが競争社会での勝ち組として生き残れる前提だとされた時期がある。実際に生き残りをかけて競争社会を勝ち抜いてきた多くは、そうした企業であった。しかしそれは成長が可能な時代のことであった。

現代社会はグローバル化が進展し、一国レベルの経済活動は困難になりつつある。しかも現代社会は成熟し、成長に依存するだけで人々の生活向上を実現するのは困難になりつつある。私たちは、環境・資源・人口・食糧・エネルギーなど人類が解決すべき課題に直面しながら持続可能な社会の実現を迫られている。

これまで価値観としてもはやされてきた多くのことが、必ずしも物事の優位性を示すとはいえなくなった。成長に依存する度合いも今までよりも少なくなったことは否めない。この間の研究活動で固定的な価値観だけでは問題解決は困難であることを学ぶことができた。

6 出会った人々への思いと感謝

こうして研究の片隅に関わったこともあり、多くの人と出会い学んできた。いずれもすでに故人となられた名古屋市立大学の指導教員であった上村正彦、松村文人の両氏は最初に出

会った研究者であり、研究への出発点となった。さらにトヨタの西三河への関わりから出会い、人並みの論文を書けるようにしていただいた恩人でもある猿田正機中京大学名誉教授がいる。猿田氏と私は問題意識が共有されている部分も数多くあり、先行研究として私の研究に磨きをかける絶好の材料を与えてくれた。

そのトヨタ研究で当時からの執筆仲間の杉山直(故人)、浅野文也の両氏がいる。氏らとともにトヨタ研究に関わる共著は7冊に及ぶ。また名古屋市立大学大学院の同窓生の仲間での継続的な共同研究を行い、指導を受けた塩見文人名古屋市立大学名誉教授がいる⁵⁾。このように、私が示唆を受けた人は数多くおり、ここには書き切れないため割愛させていただくが、多くの出会った人が研究へのインセンティブを与えてくれた。恥ずかしい話だが、作文やレポートと論文は、同じ文書でも水準が全く異なる事も判り、私の知的好奇心をそそる結果となった。

その中でも、私の未熟でつたない論文執筆を全面的にバックアップし、高い水準まで引き上げていただいた名古屋学院大学教授の十名直喜氏の指導がなければ、博士論文は陽の目を見なかったであろう。また博士論文審査に貴重な時間を割いて向き合っていたいただいた名古屋学院大学の関係者にも感謝の意を示したい。

今でこそ、社会人大学院は全国各地に展開され、「その気」があれば、そこで学び、研究に携わることができる。これは過去の時代とは異なる。社会人研究者の優位性をあげるとしたら、現場密着である。現場での日々の実践が貴重な資料を提供してくれる。にもかかわらず社会人研究者の優れた研究業績が余り日の目を見ないのは、通俗的な世界に足をどっぷりとつけているからであり、他方ではそれを研究の高い水準にまで導いてくれる指導者が少なかったことで

ある。そのため研究業績としての表舞台に出ることは少なかった。

確かに現場感覚は重要だが、それを高い水準に導くことなく埋没すれば俗流的立場に堕してしまう。アカデミズムをめざす者にとってブラグマティズムそのものは必ずしも否定すべきものではない。重要なのは、実用的なものを学術的なものに高めるための努力である。この間の研究活動で、貴重な体験をしたことだけは確かである。

7 おわりに

私は、博士論文を書き上げていく過程で、社会の変化とともに、自らも変わらなければならないことを痛感した。1989年に始まる世界史の大転換は、当時の私にとってさほどの影響を受けなかったが⁶⁾、私を取り巻く環境が、大きく変わっていった。冷戦の終焉は、人間の思考様式も行動様式も大きく変えることとなった。国内のシステムや構造に限らず、世界を取り巻く環境も大きく変わった。

私のこれまでの足跡は、文字通りさまようこともあり、安易な方向へと流されそうになることもあった。しかし曲がりなりにもこうして論文にまとめ上げることが出来たのは、社会人研究者としての立ち位置から、脱線しなかったからだと思っている。

だがこれが終わりではなく新たな始まりである。私も古希を迎えた。私はこの年になって、人生において最高の知的作業を与えてくれた恩師・友人・知人に感謝したい。

私の研究活動はこれで終わりだとは考えてはいない。終着点ではなく出発点である。次なる課題は、これまでの研究を踏まえて、より現場に密着した課題に取り組みたい。現代社会がか

かえる様々な課題に向き合いながら、次なる歩を進めたい。人々の幸せと希望をどこに見いだすことが出来るか、これからも考えていきたい。

注

- 1) 名古屋学院大学大学院経済経営学研究科学位論文。博士（経営学）
なお博士論文は、書籍化し『企業福祉と日本のシステム——トヨタの地域社会への21世紀的ななぞし』というタイトルで、2019年秋にロゴスから出版する。
- 2) 筆者が博士論文で扱った「企業福祉」とは、従来は「企業内福利厚生」という人事労務管理的色彩を帯びた使用方法が一般的で、企業の任意でベネフィットを提供する「法定外福利厚生」を中心としたものであった。筆者の視点はこれに「法定福利厚生」「退職関連制度」を加えたものとして扱っている。いわば、企業福祉とは、企業が提供する給付・サービスの総体であると規定している。
- 3) 「トヨタの「企業福祉」」『賃金と社会保障』No. 1392 旬報社 2005年
私が執筆して掲載された最初に刊行された書物である。これをベースに書籍として刊行されたのが、「格差社会とトヨタの「企業福祉」」猿田正機編『トヨタ企業集団と格差社会—賃金・労働条件にみる格差創造の構図』ミネルヴァ書房 2008年である。
- 4) 基礎経済科学研究所編『日本型企業社会の構造』労働旬報社、1992年この書物には、伊藤誠、池上淳、森岡孝二、熊沢誠、二宮厚美、渡辺治などの代表的論客が執筆している。
- 5) 塩見治人・梅原浩二郎編『トヨタショックと愛知経済』晃洋書房、2011年、ならびに「グローバル化による西三河の地域社会の変容—企業城下町を事例に」『名古屋経済圏のグローバル化対応—産業と雇用における問題性』晃洋書房、2013年、の2冊を共同研究として発刊している。この共同研究は、10人を超える名古屋市立大学

の社会人大学院の同窓生によって企画・執筆され、2018年6月には、『希望の名古屋は可能か——危機から出発した将来像』を発刊しているが、筆者は3冊目の企画には参加していない。

- 6) 1989年秋の「ベルリンの壁」の崩壊からソ連邦解体に至る「冷戦体制の終焉」が、私を取り巻く環境の変化を促したという意味である。当時、まだ冷戦は終焉していないという「強弁」もみられたが、時間とともにそういう声は聞かれなくなった。ただし、現在もこの「大転換」の意味を真摯に受けとめ、総括しようとする動きは決して多くはない。

主要業績

『「企業福祉」をめぐる最近の研究動向』オイコノミ

カ第37巻第1号 名古屋市立大学経済学会
2000年

「格差社会とトヨタの「企業福祉」」猿田正機編『トヨタ企業集団と格差社会—賃金・労働条件にみる格差創造の構図』ミネルヴァ書房 2007年

「日本の経営と企業の社会的責任—トヨタ研究と関わって」猿田正機編『逆流する日本資本主義とトヨタ』税務経営協会 2014年

「トヨタが地域社会に与えた影響——西三河地域の変容についての考察」中京企業研究No.37, 2015年

「高齢社会と「企業福祉」の役割—トヨタを事例に」猿田正機編『トヨタの躍進と人事労務管理：「日本的経営」とその限界』税務経営協会 2016年, 他